

野木小同窓会報

第 14 号  
平成 14 年 1 月  
野木小学校同窓会編集部



第39回卒(昭和23年) 玉置  
同窓会長 新田 賢

会報発行のご挨拶

新年明けましておめでとう御座います。同窓会員の皆様におかれましては、ご健勝にて新年をお迎えの事とお慶びを申し上げます。平素は本会の事業及び運営の各方面に巨りまして、格別のご協力を賜り有難く厚くお礼申し上げます。お蔭様で本会はもとより、母校も諸先生の適切なご指導と父兄各位および地域の皆様のお力添えを得て、児童は元気澆刺、人間性豊かな創造性に富む人材育成、教育活動等、学校経営も充実し、本会事業もまた極めて順調で誠に同慶の至りであります。

さて、昨年は新世紀の幕開けで、大いなる夢と希望への道のりを確かな物にすべく、意気込んだ年の始めでありました。新聞報道等を待つまでもなく、大変厳しい年であったと申さねばなりません。米での同時多発テロで、憎しみがむき出しになりました。失業率も最悪を記録、価格破壊は農産物も例外ではなく、暗い色に染まった新世紀最初の年でした。改革の目に見える成果がなく、小泉政権への失望感も出始めています。えひめ丸事件や付属池田小事件など、悲惨な事件、事故も相次ぎました。一方で、イチロー選手ら、国境にとらわれない活躍が、希望の光を見せてくれました。そして十二月一日、国民待望の皇孫殿下の誕生に国内は大いに沸き、新年の希望を確かなものになりました。そうした中でも、ふるさと

野木の里は豊かな自然の恵みに満たされ、人々は平和と安全を満喫できる極めて恵まれた環境に感謝の誠を捧げ、心安らかに越年されたと思います。ところで、世界一の長寿国日本、平均寿命の後半約七年は残念ながら、不健康で要介護の状態にある人が多いと世界保健機構は発表しました。人々の幸せは健康をおいてほかにあり得ません。健康で天命をまつとうするには、米、野菜を中心とした日本食を継続的に摂ることの必要性が指摘されております。米の消費が落ち込み、生産調整と低米価に悩んでいる生産農家には朗報ですが、多くの人の理解と協力を得る努力も、自らの実践と共に大事と申さねばなりません。昨年は、この意味から農業と自然の大切さを「農業教育」の実践と言う形で、地区の老人クラブ役員の方々が、近くの田を借り上げ「もち米」の栽培を通じて子供たちを指導して下さいました。正に学校と地域が一体となった「体験学習」への取組みであります。教育改革も新年度から始まりますが、知識の教育から生きていくための体験重視、「体験から知識が生まれる」こと

の実践の時代に、入っていくのではないのでしょうか。子供たちの健やかな成長と母校の更なる発展に会員各位の一層のお力添えをお願い致します。各位のますますのご健勝、ご多幸を心より祈念してご挨拶と致します。



ご挨拶

学校長 森口良造

日に日に寒くなつてまいりましたが、皆様方には益々ご健勝にてお過ごしのこととご拝察致します。日頃より、物心両面にわたりましたご配慮を賜り、厚くお礼申し上げます。さて、わたくし、昨年四月より野木小学校に勤めさせて戴いております。上中町内の学校勤務は初めてで、知らないことばかりです。同窓会の皆様方にご指導を賜りながら、野木の子どものための教育に力を注ぎたいと思っております。どうかよろしくお願い致します。今までの九ヶ月を振り返りますと、敬老会、野木地区民

総合体育大会、三世交代流など野木地区の方々に直接お世話になりました。本校は、「地区の方々に支えられている学校だ。」と感じております。また、昨年より新たに「総合的な学習」が始まりましたが、稲作り、ケナフ栽培、福祉体験学習、梅干し作りなど、材料の準備から子どもたちの指導まで大変お世話になりました。お蔭様で、教育内容を充実することができました。さて、近年、時代の変化は激しく、学力に対する考え方もわたしが教職にいた時(昭和四十五年)と比べて、随分



変わってきました。最初の頃は、「これ覚えていくら」という知識の多寡が問題とされてきました。それが次第に、考える力、自分の思いを表現する力や正しく判断する力をつけることが重要視されるようになりました。来年度から、子どもたちの学ぶ内容は三割、授業時間は二割少なくなり、これは、学ぶ内容を厳選し、国語や算数などの基礎的な部分は子どもたちに定着するまで指導するとともに、子どもたちの興味・関心を生かしながら、自主的な学習を促すようにするためです。本校において、これからの社会に生きて働く学力を身につけさせると同時に、心豊かな子どもへの育成を目指して頑張りたいと思っております。今後、今までの同様のご支援をお願い申し上げます。



## 旧職員からの便り

### 野木小学校での思い出

鳥羽小学校 岩本守博

九月に入ってまもなく事務局から寄稿のお知らせを戴きました。ようやく鳥羽の学校生活にも慣れ始めて二学期を迎えた矢先でしたので、そのときは、ふと野木の頃の我に返つたような感慨を覚えてしまいました。

時の流れは速いもので、この三月までの五年間は本当にあつという間に過ぎてしまった感じがいたします。教頭として寄せていただいて一年三ヶ月足らずで校長先生が亡くなられるという事件がありまして。大変なショックが走つたのですが、当時の西川校長先生が亡くなられる直前に出来たのが、同窓会のご寄付によるステンレス製の鉄棒でした。それから三週間ほど校長先生のいない学校が続きましたが、その後を私が引継がせて頂くことになりました。若輩で未熟者といふ言ひのない者でしたが、同窓会の皆様や保

護者の皆様、そして、地域の皆様を支えて頂いたおかげで何とか一年一年を凌がせて戴くことができました。

敬老会やあじさいマラソン、それに親子海水浴、時に雨に悩まされた地区と合同の体育大会（自分では天気男のつもりでしたが）、ふるさと祭り、三世代交流学習などなど、今頭の中をよぎるものはどれも地区の皆さんとの温かく深い関わりの中で成し遂げられたものばかりでございます。思えば、本当に温かい地区地区の皆様の中に、ゆつくりと浸らせて頂いた気が致します。にも拘りませぬ、何ほどのお返しも出来ないままに去らせて頂きました。それどころかスキー場はあれでよかつたかな？とか、校舎裏やプール側の駐車場や中川の土手などの整備がもう少し進められていたらなどと、ついつい及ばなかつたことが悔やまれます。

今はただ、何人かの子供たちと校長室で遊んだり俳句を楽しんだりしたことぐらゐが懐かしく思い返されます。

同窓会の皆様初め、公民館・老人会・区長会・体協関係の皆様、そして、保護者や母親クラブ・子供会の皆様方には特にお世話になりました。また、町会議員の皆様や生活会議の会長様はじめ、地区を代表される皆様方、更に、その他各

### 野木小学校の思い出

瓜生小学校 長谷美千代

種団体の皆様方、それに、直接関わりを持つことができなかった皆様方、学校職員の皆様にも大変お世話になりました。すべての皆様方に衷心より感謝とお礼を申し上げますと共に、学校ともども地区全体の益々のご発展を心より祈念申し上げます。言葉不足ではございますが、筆を置かせて頂きます。

私は、野木小学校には、平成十年四月から平成十三年三月までの三年間勤めさせていただきました。それまでの三年間は、学校現場から離れ、三方町にある県立三方青年の家に勤めていましたので、最初の一年間は、小学校生活の感覚を取り戻すべく必死だったように思います。二年目三年目と過ぎ、ようやく野木小学校全体の様子が見えてきたところで転勤となり、とても残念に思いました。

野木小学校を思い出す時にまず一番に心に浮かぶのは、今頃はコスモスが咲き、赤とんぼが飛び交っているであろう通学路を、子供達が連れだつて帰る姿です。「道草をしないで」と指導しつつも車の行き来をほとんど気にせず歩いて通学路は、子供達にとつて格好の友達との交流の場であり、自然と触れ合う場であつたと思います。それにつけても心残りなことは、校歌にある箱ヶ岳や、大きな木がある子供達が教えてくれた、杉山や兼田の神社に行けなかつたことです。もつと野木地区の様子を知っていれば、ま

またちがつたかわり方が子供達とできたように思います。

野木小学校に来て驚いたことは、スキー教室で保護者の方が子供達にしっかりと指導して下さったことです。それまでは、教師が指導するものと思っていましたし、クラブ活動や総合学習等で外部講師をお願いするようになってはきましたが、スキー指導を手伝っていただくだけでなく、保護者の方がリーダーシップをとって子供達を指導されるのを見て、野木地区にはいろいろな才能を持つていらつしやる方がおられるのだと改めて気付かされ、頼もしく感じ



ました。

老人会から懇談会の申し込みがあり、学校職員と話し合いを持ったことも印象的です。子供達のためにできるだけ協力をしたいという老人会の方々の熱意が伝わる会でしたが、これは、学校側がお願いしたわけではなく、老人会で考えられたことなので、その積極的な姿勢に感心させられました。今後、豊かな自然と地域の方々の力強い支えの中で、野木小学校の子供達が、心豊かにたくましく育つていきま



### 会員からの便り

## ふるさと

第30回卒(昭和14年)

中野木 速水 誠五

遠い遠い昔の話、昭和十四年野木小学校を卒業させて頂きました。六十二年前のことですから惚けもします。頭のですから惚けもしません。頭の天辺もかつて生えし自慢の毛、見事にツルリとして、太陽の恩恵に照り返り居ります。そんな惚け頭の中で、思い出

年代の流れとは申せ、今、今にもかもあり余つてなんでも捨ててしまふ世の中ですが、片寄った自由と冷え切った今の世代には、もうあのふるさととは跡形もなく消えてしまつたのでしょうか。

んてなもの、古い写真の如く色褪せてピンボケで、さて浮んで来るのは途切れ途切れのいわゆる「ふるさと」の景色と、本当のおだやかな豊かさだった頃です。

韓退之の文はよく聞き読み、又書道の手本で感動するところですが、その中で、友人が老いて官職を辞して故郷に帰る姿を述べて「今の帰るや、其の樹を指して云はん。其の樹は、吾が先人の植えし所なり。其の川、其の丘は、吾が童子

母に作つてもらつた藁草履を履いて学校へ、やがてすり切れて、雨の日など撥が背中まで飛びました。道添いの小川には、ふな、メダカ、ドジョウ等多彩な動植物、よく友と遊んだお宮の森やお寺の境内、大川の淵の桑の実、野いちごを食べ、魚を追つたり飯つぶで釣つたり、貧しい中にも自然豊富でせいたくな境地で育てられたふるさどがありました。

たりし時釣遊せし所なり」とあります。父の植えた木が残つており、子供の時に鮒を釣つた小川や鬼ごっこをした丘が残っているからこそ、故郷はなつかしいので、アスファルトやコンクリートの大道、坦々として自動車を走らせるには快適であつても、道端の柳の影も消え、道に添う小川のメダカも見えず、東西南北

何処へ行つても、どちらを眺めても昔馴染みの物は一つも見えない。そこには「ふるさと」は感じられないと思います。然し乍ら今日の情勢、コンクリートの建物、アスファルト道路を拒否は出来ません。文明は、人の生み出したものでありますが、一たん生み出された文明は、今度は人を支配し、人を拘束し、苦しめるようになるのではないかなあ。

母の作つて呉れた小さな昼弁当を持って、母の作つて呉れた藁草履を履き、母が夜なべで繕いで呉れたズボンをはいて学校通いのふるさとの道、そして景色、なつかしの思い出は、次第に惚けて、かすんでやがて消えて行きました。



## 戦後と今を思う

第40回卒(昭和24年)

兼田 辻本 靖

同窓会長様から原稿用紙が届き、在学当時の思い出を気軽に書くようにとの事で何を書いたらと迷いましたが、思いのまま記させて頂きます。

私は第四十回、昭和二十四年の春の卒業です。二十八名の内五名亡くなられ、今は淋しさ一杯です。私達の時代は、お弁当も粗食で、白御飯だと叱られ、家では大根飯、おやつはそら豆やよもぎ餅を堅く干したものでした。学校は勉強よりも食糧増産で、武生の茅山を開墾し食物を作り食べました。藁ぞうりに着物にモンペと防空ズキンという姿でした。大人は糞笠又油紙をござに張り付けた雨具でした。当時の百姓は米と品物との交換で、お金は殆ど必要ありませんでした。戦争中には、B29の飛行機が井ノ口駅附近を爆撃しました。夜は空襲警報電灯の傘に黒布を掛けたり、又防空壕にも入りました。戦争が終わり、兵隊さんが帰って来られましたが、父は帰らず、

我等四人の子供を残し戦死。友達のおちゃんと言う声が聞えると、淋しくて仏様に行つた事が今は夢の様です。三年生の時、野木村で村葬をして頂き、悲しさも知らず父の写真を抱え行列し、嬉しくて喜んでいました。その頃から母が病気で長く寝ていたので、祖父の百姓手伝いをしたり朝早く御飯を炊いたり、拭き掃除や弟、妹の世話をし学校へ通つたのを覚えています。校長先生は奥本一先生で担任は竹中多門先生。お二人を父と

思う程、とても優しくして下さいました。遊びは工夫し、多く有り、本当に楽しい学校生活でもありました。さて、現在の社会は、いじめ、児童虐待、子供達に関する事件や犯罪が多様化し毎日そんなニュースで驚くばかりです。考えると、子供の立場を聞いてあげ、ストレスを無くし、環境や家族、又大人が見守つてあげ、更に真の声を聞く事が大切なのであり、今、大人

がその複雑な社会を作っているのではないのでしょうか。過日先生方と私達民生委員が懇談会の機会を得て情報交換する中で「今は大きな問題は無い」とお聞きし、又親御さんと連絡を密に皆んなで助け合い健全な成長を見守つて下さるとの事で安心しています。

## 半世紀前の思い出

第44回卒(昭和28年)

堤 右近 卓 弥

この先、少子化時代にある中、子供達が健やかに心身共よき大人に育つてほしいと願う一人です。

終わりにあたり、同窓会の更なる発展と皆様の御健勝をお祈り申し上げ、粗文に成りました事をお詫び致し失礼します。 合掌

私が母校、野木小学校へ入学したのは昭和二十二年で、今から五十四年前、半世紀以上前のことである。ついこの間の様に思えるが、ずいぶん歳をとつたものだなあと、今更ながら時の流れの早さに驚いている。

当時は上中町村合併の前で小学校と中学校が同じ校舎で勉強し、校名も通称「野木小中学校」と呼んでいた。入学早々から八年も年長の「おじさん」、「おばさん」、いや「お姉さん」が同じ学校にいたわけ、僕たちは「おとな」が遊んでいる姿を見ながら大きくなつていった。

現在は、故中川平太夫さん(のちの県知事)で、毎年、学芸会の時には、講堂で大演説を行い、口角あわをとばしながらの熱弁だった。これを子や孫たちのために舞台の前に集つた大人たちは、感心しながら聞き惚れていたものだ。当時の中川さんは、確か三十歳を出たばかりだったのに、およそ二十年後に福井で再会した私の印象は、当時と何も変わらない。テーブルを叩いてスピーチしていた中川村長さんだった。二十年前が老けていたのか、二十年後が若々しかったのか判らないが、どちらも正しかったように思う。

現在の野木校舎は鉄筋で立派になつてはいるが、当時の木造の校舎には、風情があつてとても良かった。学校のすぐ前に小川(用水)が流れていて、石の橋を渡ると両側に石の門柱が立ち、入つて左に行くと素晴らしい柳の樹があつた。垂れ下がった枝葉が風にゆられ、小川の川面にとどきそうな感じだった。正面の校舎の上手には、二宮金次郎像があり、歩きながら本を読み、うつむいていてもヤンチャな僕たちが見透かされているようだった。僕は体が小さかつたこともあり、入学早々からガキ大将の標的にあつた。「ハリツケの刑」などと言つてよくいじめられた。夏休みに入るとホツと一息ついたが、「あいつさえないなくなつたらなあ」と真剣に思つたものだ。いま考えると、あんなささいなことでもどうしてあんなに恐怖心を抱いたのか不思議でならない。当時のイジメやケンカには、子どもなりに「手加減」というものがあつたように思う。

五十年も前のことでも、なつかしい思い出が次々と浮かんでくるが、残された人生において、この貴重な「思い出」を大切に、がんばつて行きたい。

# 私の想い

第56回卒(昭和40年)

大飯町 猿橋 正子

現在の私は、三人の息子達も二十二才、二十才、十七才とそれぞれに何とか成長し、野木小学校の思い出も遠くなくにけりといつたこの頃でした。

えられた事は、広い世界で縁あつて家族となつたからには仲良く、助け合つて、死を迎えるその日まで精一杯生きたいものだといふことです。

野木小学校時代の私と、本郷小学校に通つた息子達の環境の違いには目を見張るものがあります。恵まれた息子達が良くて、私の時代は…とは思いたくありません。杉山から一時間以上かけて歩いて通つた事、学校から帰つてから暗くなるまで、かんけり・なわとび・かくれんぼなどして外で遊んだ事、三年間の分校生活も経験しました。今から思うとほんとうになつかしくて、目頭が熱くなつてきます。

おじいさん、六十才で逝つた父に、孫の成長を教えてやつて下さい。そして、あの世とやらで、実父と義父が、「嫁が、息子が…」 「娘が婿が…」 「孫達が…」 と仲良く居てくれることを祈りつつ、息子達が二人の良い所をもらつてくれれば良いかと思うこの頃です。

緑あつて本郷に嫁ぎ二十三年。昨春に実父の十三回忌を済ませ、夏には義父を送りました。杉山で父と過ごした二十五年、本郷での義父との二十三年間。様々な思いが胸をよぎります。人の一生、死について考えさせられました。いろんな面で立派だった義父の生き方で教

私は、御蔭様で元気で、仕事に家事にと、なんとか頑張つています。七人家族が、二人の息子は大学生で家にはおらず、おじいさんを亡くして寂しくなりましたが、今、この時を大切に、充実した日々を送りたいと願つています。

# 野木小学校へ

第81回卒(平成2年)

上野木 清水 千恵

昨年の四月、野木小学校でピアノを弾かせて頂く機会を設けて頂きました。私にとつて、自分が小さい頃通い慣れた小学校のステージは、今まで立つたどのステージより大きく、そして名譽あるステージとなりました。

これは、この子どもたちがピアノを、音楽をずっと好きであつてほしいということ。最近感じる事の中に、どんなに短い演奏の中にも性格がでるといふことがあります。十六小節の易しい曲を弾いても、落ちついた弾き方をする子、元氣いっぱい弾く子、速く弾く子など、みんな違つた弾き方をしてくれます。私は、その個性と性格をうまくピアノの演奏に出してあげられるようになりたいです。そして、はやく素敵なピアノ講師になりたいです。

現在、私はピアノ講師をしています。この職業を始めて一番楽しいことは、たくさん子どもたちと、マンツーマンでピアノを勉強できることです。レッスンの中で、みんなが本当に素敵な個性を持っているな、ということに感動しながら、どうやったらこの子の個性をうまく音楽に結びつけられるだろうと、毎日四苦八苦しています。音符をよむのは苦手だけど、歌をうたうと一番な子、音を聴きわけるのが得意な子、曲に物語をつけるのが得意な子、毎日きちんとおけいこできる子、たくさんさんの個性の持ち主と毎日勉強しながら、私が一番に思う

野木小学校でピアノを弾きながら、私の小学校時代を思い出しました。先生方は、私にピアノを弾く機会をたくさん与えて下さり、応援して下さいました。私がかつてピアノを続けてこれたのも、小学校の先生方のお心遣いもあつたからだと思ひます。

# 同窓生

第85回卒(平成6年)

下野木 小谷 和央

野木小学校で過ごした六年間というものを、今思い返せば、まず第一にうかんでくる思い出は、友達と過ごしたことだろう。特にエピソードに残る思い出はないが、小さい思い出がたくさんある。そんな所が僕は大切でかけがえのない思い出だと今になって思う。

野木小学校で過ごした六年間の友達とは、連絡をとつていりし、時間が合うことがあれば、集まつて遊ぶことがある。その時には、昔の思い出も語りたりすることはあまりないと思う。みんな小さい思い出ばかりで、覚えてないのではない。つまり、小学校の六年間を、漠然としたもので、とても居心地が良かった空間としてと



今でも、野木小学校時代から

野木小学校で過ごした六年間の友達とは、連絡をとつていりし、時間が合うことがあれば、集まつて遊ぶことがある。その時には、昔の思い出も語りたりすることはあまりないと思う。みんな小さい思い出ばかりで、覚えてないのではない。つまり、小学校の六年間を、漠然としたもので、とても居心地が良かった空間としてと

らえているのだと思う。アルバムで例えれば、僕達の思い出は、一コマ一コマ写真にはりつけたアルバムではないと思う。一冊のアルバムとして存在しているもので、一ページ一ページの間にも思い出があり、もつと言えば、写真の一コマ一コマの間にも思い出がつままっているアルバムだと思う。

僕達の地域では、中学校までは、全員が同じ中学校にあった。高校入学とともに、人それぞれ違った道に進んだわけだが、その頃からもう八年近くたった。今では、大学に行った者や、就職した者、結婚した者もいる。それぞれの道でがんばってほしい。

今、とても好きな言葉がある。京都大学アメリカンフットボール部監督、水野弥一の言葉で、「選手にもよく言うんですが、『ベストは尽くすものやなく越えるもんや』と。そうすることで、はじめて自己認識ができ、新しい自分を発見できる。そういう事を追及する姿勢を、僕は知性やと思うんです。」という言葉だ。えーか、おまえら、自分に線引いたら負けやでー。

寒さ厳しき折、皆様におか

れましてはお変わりなくご清栄のこととお慶び申し上げます。全国各地に広がっておられる皆様の心が時の隔たりを超えて触れ合っているものと信じて、私のようなおろか者が、会報第十四号に原稿を寄せさせて

もらいましたことを重ねてご報告致し、皆様の絆が深まることを願っている日々であります。

根性や可能性という言葉にかけてみたい。

### 上中町家庭の日啓発作文コンクール

銀賞

## おばあちゃんの足

四年 山形 真由

「真由、せんたくもんあるきてきて。」

と、おばあちゃんが言いました。へんじをして、せんたくかごをもって、せんたく機のところへいそぎました。せんたく物を中に入れると、スイッチをおしました。水がながれてきます。せんざいパックをいれて、ふたをしました。

ピーピーピーと、おわったあいすが聞こえました。せんたくかごにいれると、ほすところにおいて、ほしはじめました。

「ええっと、Tシャツはハ

いが終わると、おばあちゃんは、「ありがとう。」

と言います。

お手つたいは、兄ちゃんも、弟の真司もしています。兄ちゃんも、にわのおそうじとか、お皿はこび、真司は、おばあちゃんのたすけ係みたいなので、車のドアを開けたりしめたりしています。

おばあちゃんでも、毎日、朝とか夜にするものがあります。それは、おきょうです。私では、あんまり意味が分からないけれど、おばあちゃんは、たぶん、ちよつとの意味なら知っているとと思います。

もう一つ朝にやっているものがあります。それは、テレビ体操です。立ったままではなく、すわったじょうたいです。私も、ラジオ体操がないときに、一回か二回やってみました。

「ぼくもやる。」

と、真司も一回やってみたことがあります。第一体操だけだったけど、とてもつかれました。

一週間ぐらいすると、だいぶ楽そうに歩いています。もうちよつとたつたら、つえなしで、すこし歩けていました。

「もう、あるけるんけ。」

と聞いたたら、

「ちよつとはな。」

と答えていました。私のあとに、真司が、また同じことを聞いていました。おばあちゃんは、同じ返事をしました。

八月十三日に、ほうじょうさんが二人こられて、おきょうをとえはじめました。おばあちゃんも、何も見ずにとなえはじめました。見ないでとなえられたのは、毎日おきょうをとえしているからかなと思います。

おきょうが終わって、ほうじょうさんがかえんになると、お父さんから、まっこをやっていたきました。私がやったときは、ちよつとあつかったです。おもわず、

「あつち。」

と言ってしまった。

おばあちゃんは、時々、「足があるだけでも幸せや。」とか、

「足があるんやから、とりに行きな。」

と言います。よく言われるのは、私と真司です。兄ちゃんも、ちよつと言われたことがあります。つえつきのおばあちゃん、これからもできるだけお手つたいをして助けてあげるよ。



# たん生日会

六年 森岡紗貴子

輪かざり、プログラム、ゲームの準備、ケーキ、プレゼント、これはわが家のある行事にかかせないものです。その行事は、たん生日会です。わが家では家族六人、それぞれたん生日にたん生日会をひらいて、家族みんなで祝います。パーティーを計画して、すすめていくのは私と妹です。私と妹はプログラムを立て、はじめの言葉、終わりの言葉、司会と、けっこういいそがしいです。

七月二日は母のたん生日でした。月曜日だったので、プログラムは日曜日にたておきました。

夜七時前。そろそろ母が帰ってくるころです。電気を消して待っていると、とつ然、妹がさげびました。

「あつ、輪かざりがしてない。」

「あれ、ほんまやわ。」

輪かざりは、私が一年の時の冬、祖母のたん生日におり紙を切って作ったかざりです。もうすぐ私と同じ六年生になります。あわてて輪かざりを天じょうにはりめぐらせたその時、母と父が帰ってきました。

「おたん生日おめでとう。」

そう言っはく手をして電氣をつけました。

「ごはんを食べたあと、いよいよパーティーのはじまりです。妹のはじめの言葉が終わり、次は『タイムショック』です。だされる問題はだいたい親せきのことです。」

「お母さんの妹の二番目の子どもの名前は。」

「お父さんの兄ちゃんの子どもの大学へ行っている人の名前は。」

などと、次々質問します。五問中三問以下ならみんなが正しいというまで自分で回ります。その次はトントンずもう大会です。みんなそれぞれゆきの川、母の里などのしこ名を

もっています。この日、トーナメント式の試合で優勝したのは祖母でした。

それから、祖母に、母の母子手帳を読んでもらいました。それには、母が生まれた時のことが細かく書いてありました。その手帳は茶色になり、ポロポロでしたが、祖母は大切にしまっておいたんだなと思いました。祖母の母への気もちがよくわかります。

その後は、スケッチ大会です。スケッチブックにあらかじめりんかくとかみがたをかいしておいて、みんなで分たんして母の顔を仕上げるのです。

まゆげ担当の祖父は、

「わしゃもう、わからんわ。」

と言いながら、ていねいにかいていました。右目担当の父は、

「目って意外とむずかしいなあ。」

と言いながら、そっくりな目をかいていましたし、左目担当の妹はとくいのマンガのキラキラした目をかいていました。

鼻担当の祖母は、

「よりよって一番むずかしいところやなあ。」

と、しん重にかいていました。私のかいた口は、おひなさまのようなおちよぽ口でした。できあがった絵を見てみんな、

「まあまあ似とるやん。」

と仰いました。母は笑っていいました。その絵はそれぞれかいた人がちがうので、ピカソの絵みたいになっていました。でも、それぞれ一つ一つ、どこか母に似ている気がしました。

その後、母はインタビュで、

「今日はとても楽しかったです。」

と仰いました。



# カメのこと

二年 辻本晃士

祖父と祖母が生まれなければ母は生まれなし、父と母が出会わなければ私も妹も生まれていなかったんだと思うと、なんだかふしぎな気がします。たん生日はとても大切で、めでたい日だと思います。そして私は、生まれてこれてよかったと思っています。

次のたん生日会は九月二十六日、祖父の番です。

今年の春、ぼくは、わるいことをしました。一ぴきのカメを見つけてポーンとなげました。ぼくは、先生におこられました。それから、何日かして、おかあさんにもおこられてしまいました。

やばい。なんでばれたんやろと思っいました。

おかあさんは、ぼくに、

「すわりなさい。」

と、こわいかおをしていいました。おかあさんは、

「あきひとは、だれから生まれたんや。」

「人間だけじゃなく、どうぶつにも一つずついのちがあつて、だいいなものやから、いたずらしたらあかんで。そ

して、あきひとも、いのちを  
大じにせんとあかんのやで。」  
といました。その時頃は、  
はじめてわるいことをしたと  
思いました。二どと、こんな  
ことをしてはいけないと思い  
ました。そして、あのカメラが  
しななくてよかったと思いま  
した。ほっとしました。

きゆうに、ちゃんとお家か  
えれたかなあ、ととても気な  
りました。ことばがしゃべ  
れたら、あのカメラにあやまら  
んとあかんと思いました。ほ  
くのしたことは、ほんとうに  
わるいことだったと思いました。  
カメラがしんでいたら、ぼく  
はもつともつとこうかいする  
と思うけど、しなくてよか  
ったし、いのちは一つしか  
なくて、とても大じなことも、  
おしえてもらつて本当によか  
ったとおもいました。

これからぼくは、ともだち  
にも、どうぶつにもやさしく  
しようと思います。そして、  
こんどカメラにあつたら、かな  
らずあやまろうと思います。



銅賞

## わたしとお父さん

三年 森岡 ゆき子

わたしのお父さんは、わた  
しが生まれた時、

「おにぎりみたいやなあ。」

と言ったそうです。たしかに  
写真を見ると、顔が三角でし  
たが、おにぎりとは……。お母  
さんから聞いて、「おにぎり  
か……」と思いました。

お父さんはBがた、左きき  
です。私もBがた左ききでず  
つとよろこんでいましたが、  
このごろ私がよく右手をつか  
うので、少しがっかりしてい  
ます。でも私は左で十分食べ  
たり書いたりできるので、私  
は左ききです。お父さんがつ  
かりしないでね。

お父さんは何でも知ってい  
ます。私が、

「これ、どういう意味？」

と聞くと、

「こは、こうするんや。」

と、やさしく教えてくれます。  
でも少し気楽なところもあり  
ます。私がお母さんに、

「なあ、先生がなあ……。」

と言うと、お父さんは、

「お父さんかっこいいって  
か？」

「……。」

と言うこともあります。

それから、しゃれもどくだ  
です。このあいだ、夕食にダ  
イコンが出た時、

「だいこんは、だいこん物。」  
とか言います。ほんつ当にお  
もしろいです。

それから私たちのみかたに  
もなります。たとえば、

「お母さーん、これ買って。」

と言つても、お母さんは、

「ダメ。」

と言います。そんな時は、

「お父さーん、これ買って。」

と言います。すると、

「よし、買ってやろう。」

とか、いろいろみかたになつ  
てくれます。

私が年長の時は、自てん車  
の乗り方を教えてくれました。  
二年の時は、一りん車をいつ  
しよにれん習しました。今で

はすいすい五百メートルぐら  
い進めます。

そのお父さんが、七月二十  
二日から八月十五日まで、ア  
メリカの大学へ英語のべん強  
に行っていました。二十五日  
の間、メールや手紙で会って  
いました。

でも、本当は、お父さん自  
身に会いたいと思いました。  
メールや手紙だと、お父さん  
の顔は直せつ見えません。お  
父さんに会うと、顔も見られ  
るし、気もちも伝えられます。

お父さんがたつとき、手紙  
とお守りをわたしました。そ  
のお守りは、「けつこうこう  
かがあるようです。」とお父  
さんがメールに書いてくれま  
した。

お父さんは、カリフォルニ  
ア洲に行っていました。わた  
しは、アメリカの事は知りま  
せんが、教えてもらえばある  
ていどわかります。

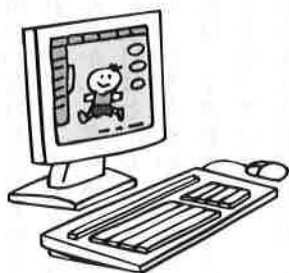
お父さんは、英語がとくだ  
だと思つけど、大学では、わ  
からないこともたくさんあつ  
たそうです。私もときどき英  
語をジュニアファーストやアン  
ドリュースンから学校でなら  
つています。この前英語をな  
らつた時、ドキドキして、う  
まくいえるかなあと思いました。

だから、手のひらに人という  
字を書いてのみました。すると、  
うまく言うことが出来ました。  
お父さんにそのことをいうと、  
頭をなでてくれました。英語  
が話せると、世界のひと話が  
出来ます。だから、早く私も  
英語が話せるようになりたい  
です。

お父さんがいなくても、夏  
休みは楽しい毎日でした。でも、  
お父さんが、帰つてきてから、  
もつと楽しくなりました。私は、  
お父さんが帰つて来た時、

「お父さーん、おかえりー。」  
と言つてとびつきました。お  
父さんも、うれしかったんだ  
と思います。私をだき上げて、

「たたいまー。」  
と言つてくれました。お父さん、  
大すきです。





銅賞

# 心に残った言葉から

五年 辻本昇子

夏休みのある日のお昼の事です。

私は、お母さんとお姉ちゃんと弟の四人でごはんを食べていました。

「いただきます。」

四人でいろいろな話をしながら食べたごはんは、とてもおいしかったです。

「ごちそうさま。」

私達が大きな声で言ったあと、お母さんが自分の中学校のころの話をしてくれました。

「天地一切の恵みと作られた方々の労苦に感しやいたします。いただきます。」

「生命に新しい力をいただきました。ごちそうさまでした。」

手を合わせて、お母さんが急に何やら言い始めました。私たち三人はキョトンとして聞きました。お母さんが中学生だったころの、もうずいぶん前の話でした。名田庄中学

校では、給食を全校一緒にランチルームで食べていたらしいです。その時に、この言葉を全員で言ってから食べたそうです。私はお母さんと聞いてみました。

「昇子やお母さんや、みんなが生きていくのに食事をするやろ。お肉やお魚や野菜や...。それって全部、牛やブタやお魚をとって、それらの命をぎせいにして人間って生きてい

るんやで。だから自分が健康で生きていられる事に感しやせんとなあ。」

と教えてくれました。私は何だかすごい事だなあと思いました。私がいっつも食べているものは、動物や植物の命やったんや、とあらためて知りました。

「これきらい。イヤだ。」

と言ったりしているけど、こりゃあバチが当たるなあーと思いました。

お母さんの作ってくれるごはんも、学校の給食もすごくおいしいです。いろいろなものの命をもらって私達が生きていられる事や作ってくれた人達に対する感しやの気持ち

をわすれてはいけないと思います。今までは全然そんなふうに思った事がありませんでした。だから、好ききらいも

したし、食べ残しもしました。今の豊かな日本にも、おなかいっぱい食べられない時代がありました。私たちは一番豊かな時代に生まれた子どもたち

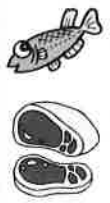
なんだろうなと思います。何でもあつて当たり前、おなかいっぱい食べられて当たり前だという気持ちを持ってしま

まっている事が少しはずかしい、せいたくな事なんだと気が付きました。

「天地一切の恵みと作られた方々の労苦に感しやいたします。いただきます。」

「生命に新しい力をいただきました。ごちそうさまでした。」

暑い暑い夏のお昼に私が初めて聞いた、いつまでもいつまでも心に残る言葉でした。



# 将来の夢

野木小学校六年生

○わたしは古着屋の店をオープンさせたい。

植野 由賀里

○プロと大リーグをまきこむような野球の選手になりたい。

河原 健太

○私の将来の夢は、美容師です。いろいろな人の髪を切

って、いつでもうちの店に来てもらえるといいです。

倉谷 奈緒

○ぼくはゲーム会社に入って、とてもおもしろいゲームソフトをたくさんつくりたいです。

田中 皓大

○私の将来の夢は、トリマーになることです。トリマー

になって、みんなのいぬをかわいくカットしてあげたいです。

田中 麻理奈

○わたしは、おいしいパンの店を開きたいです。みんな

がおどろくようなおいしいパンをつくりたいです。

田邊 里果

○わたしは、かんごふさんになりたいです。かんごふさん

になって、お母さんといっしょに仕事をしたいです。

辻井 ひとみ

○わたしの夢は、動物関係の仕事をする事です。動物

が好きだからです。

西野 愛

○ぼくの夢は、プロ野球選手になって、イチロー選手みたいな有名選手になりたいです。

則直 佑弥

○わたしは、将来ケーキ屋になりたいです。新メニュー

を作って売りたいです。

橋本 美奈

○ぼくの将来の夢は、ゲーム屋をやることです。

森 瑛

○カウンセラーになって、人のなやみをかいけつしてあげたいです。

森岡 紗貴子

○ぼくは、大人も子どもみんなが買ってくれるゲーム屋さんになりたいです。

山田 昌

○私は、早く結婚したい。

山本 舞姫

## 平成12年度 野木小学校同窓会会計決算書

## 〔収入の部〕

項目	12年予算	12年決算	増減	備考
繰越金	20,808	20,808	0	
会費	303,000	302,000	△1,000	1,000×302
広告掲載料	0	0		
雑収入	1,000	1,737	737	会誌4冊分 貯金利息137円
繰入金	0	0	0	
合計	324,808	324,545	△263	

## 〔支出の部〕

項目	12年予算	12年決算	残額	備考
会議費	20,000	992	19,008	会報編集委員会缶茶
事務費	10,000	7,418	2,582	コピー代、プリンターインク
通信費	92,000	94,475	△2,475	会報郵送料、会報寄稿依頼状郵送料
会報費	130,000	99,200	30,800	会報印刷代、寄稿謝礼図書カード
記念品費	9,000	7,560	1,440	卒業生記念品
総会費	20,000	15,246	4,754	理事総会茶菓子、缶茶
特別会計費	30,000	70,000	△40,000	特別会計へ繰り入れ
予備費	13,808	10,000	3,808	香典、饂飩
合計	324,808	304,891	19,917	

収入決算額 204,808円 支出決算額 204,891円 = 19,654円 残金19,654円は13年度へ繰り越します。

監査の結果、正確に執行されたことを認めます。

平成13年4月27日

監事

森 克 彦 (印)  
倉 谷 清 一 (印)

## 編集後記

本年度も野木小学校同窓会員の皆様にお届け出来ますことを喜んでおります。例年ならば十二月中旬に会報をお届けしているのですが、今年度は事務局の不手際により、年が明けての会報発行となりました。会員の皆様にお届け出来ず、誠に申し訳ありません。心よりお詫び申し上げます。本会報は、野木地区の同窓会会員より拠出していただいた会費により発行しております。今回で十四号を数えるにいたりましたが、これまでに至る会員皆様のご尽力・ご協力に深く感謝申し上げます。今後とも歴史ある野木小学校同窓会の会報発行へのご協力をよろしくお願いたします。会報への寄稿をお願いしました折りには、どうかよろしくお願いたします。

さて、学校では、昨年度より「総合的な学習」が実施されておりますが、野木小学校においても本年度は昨年度とはより多くの「総合的な学習」の時間を設定し、学習を進めてきました。その中で、五年生は米作りを中心とした学習を進めており、田植えから収穫・脱穀まで地域の同窓会会員の皆様方に変なお世話になりました。田植えの当日には、二十数名の老人会や育友会の皆様にお世話になりながら、五年生の十名の児童が田植えを体験しました。秋には、田植えと同様に多くの皆様のお世話になりながら餅米の刈り取りを体験させていただきました。その米で十一月十一日三世代交流の中で餅つきをしました。児童に注がれる地域の皆様の温かい眼差しを例年以上に感じさせていただいた年でした。

